

広島県高田郡吉田町

森山積石塚発掘調査概報

1975. 3

広島県教育委員会

広島県高田郡吉田町森山積石塚発掘調査概報

目 次

1. 位置と歴史環境	1
2. 調査の経過	4
発掘調査日誌抄	5
3. 検出の遺構	7
4. 出土遺物	13
5. まとめ	17

図版目次

- 図版 1. a. 積石塚遠景（西より）
b. 積石塚近景（北より）

- 図版 2. a. 表土層の状態
b. 積石塚全景（東より）

- 図版 3. a. 積石塚全景（南より）
b. 積石塚断面（南より）

- 図版 4. a. 積石塚外周断面（南側）
b. 人骨出土状態

- 図版 5. a. 人骨・副葬品出土状態
b. 土師質土器出土状態

- 図版 6. a. 土師質土器・須恵器・陶磁器
b. 土製品・石製品・鉄製品・古錢

挿図目次

- 第1図 積石塚位置図（1/2.5万）.....1
第2図 積石塚地形図.....7

- 第3図 積石塚層位別平面図.....8
第4図 積石塚平面図.....9

- 第5図 積石塚断面図.....10
第6図 人骨・副葬品出土状態実測図.....11

- 第7図 出土遺物実測図.....14

「第1図に使用した地図は、建設省国土地理院長の承認を得て、同院発行の2.5万分の1地形図を複製したものである。（承認番号）昭和50中複、第6号」

1 位置と歴史環境

森山積石塚は広島県高田郡吉田町大字吉田字大浜1165に所在する。

吉田町は広島から北東へ約45kmの中国山地南側、標高約200mの地に位置し、江川の支流可愛川によって開けた山間盆地の町である。かつては毛利氏の城下町として、元就、輝元の代を中心として戦国期には隆盛を極め、江戸期に入ってもその名ごりと地理的条件が幸いして商業を中心とした宿場町として栄えた。

吉田と毛利氏の関係は、承久の変(1221)以後、毛利氏が吉田荘の地頭となってからで、延元元年(1336)毛利時親の吉田下向で決定的なものとなる。当初毛利氏は現在の郡山城跡の東南の一画に城を築いたが(旧本城)、勢力の増大した元就の代には現在の位置に郡山城を移した。

森山積石塚は、この旧本城の東方約300mの水田中にあって往時の城下の中心に近く、それだけに毛利氏との関係は密接である。



第1図 森山積石塚位置図 (○印)

(1/2.5万 安芸吉田・安芸横田)

1. 大浜1号積石塚 2. 大浜2号積石塚 3. 青山1. 2号積石塚 4. 郡山城跡

5. 郡山旧本城跡 6. 尼子氏本陣跡(青光井山城)

すなわち毛利興元の代、特に永正年間（1500～1510年代）には、隣地甲立の五竜城主宍戸元源と數度にわたる抗争があり、この付近一帯も戦場となつたらしいし、元就相続以後天文9年（1540）の尼子氏の来襲、いわゆる郡山合戦では、緒戦となつた槍分・太田口の戦いがこの地の南で行なわれている。

宍戸氏との抗争については、当時互に勢力をのばしつつあった畠氏の勢力争いで、永正4年（1607）から同13年までの10年間続いた。

この抗争については毛利方の文献しか残っておらず、従つて宍戸氏を攻撃したもの、つまり吉田地域を除いたものしか記録されていないが、文政2年（1819）の「国郡志御用ニ附下調帳」吉田村の部には「廐祠の部」の記述の中に『森山』として「大浜の南に當て田ノ中ニアリ 右ハ荒神の祠有之ハ申向の頃廐壇仕候哉相知不申候由田中に塔樓有之莖藤山を成す 附

毛利宍戸不知の頃宍戸勢七八十騎此所に屯を構郡山の南口を切破り候故郡山南の谷を南破谷と申由間々申候得共其説不詳」という記述があり、宍戸氏が来襲しこの地に陣を構えたことが記されている。

また郡山合戦については、尼子氏と絶交して大内氏についた元就が次第にその勢力をのばし、これを恐れた尼子晴久が天文9年（1540）に元就の本拠地である吉田郡山城を攻撃したもので、1回目は吉田に達するに至らず、2回目に郡山城下で戦つたものである。その戦では、当初毛利方は郡山城に籠城し、槍分・太田口、広修寺縄手、武圓縄手等で局地的に戦っていたが、尼子軍が郡山の向いの青光井山に陣を構えるに至り主力戦となつたもので、結果的には毛利方の勝利に終つてはいる。

この郡山合戦で森山積石塚に関係深いのは槍分・太田口の合戦である。「陰徳太平記」卷10、「槍分合戦之事」「太田口合戦之事」によれば、この合戦では尼子軍4～5000人に対し、毛利軍500人が戦をいどんで大勝し、尼子軍數10人を討ちとったことが詳細に記録されている。

このように森山積石塚周辺では、毛利氏支配下の約300年の間に記録に残るものだけでも2度の戦乱があり、數10人を数える死人が出たようである。

次に森山積石塚自体の記録をさがしてみると、先述の文政2年の「国郡志御用ニ附下調帳」の他、これらをもとに編集された「芸藩通志」卷66の「廐廟附廐祠」の部に「荒神廐祠」として「吉田村森山にあり」という記述がある。また宝暦9年（1759）の「吉田村社寺覚書」には郡山城下には4つの荒神があるとし、その一つ櫻荒神がこの地であろうことが想定される記録があり、元治元年（1864）に浅野家が作成した『吉相山之図』にもその位置が記入され墳丘の上に樹木が描かれている。これらのことから、森山積石塚は、すでに宝暦9年にはその積石が何らかの形で土におおわれその上に荒神社が建つており、それも文政2年には廐祠となって元治元年にはその上に樹木が育つてしたことになる。

名 称	所 在 地	立 地	形状及び規模	備 考
1 森 山	大字吉田字大浜	平地水田中	円形 径11m 高1.5m	
2 大浜1号	大字吉田字大浜	平地水田中	円形 径2m 高1m	完 存
3 大浜2号	大字吉田字大浜	平地水田中	円形 径1.5m 高0.3m	園道により一部破壊
4 大 賀 堀	大字吉田字大賀堀	平地水田中	円形で2m前後のもので あったという	消滅、内部より甕がでたと いう
5 青山1号	大字可愛字青山	丘陵斜面畑	円形か、径3m、高0.5m	畑により一部破壊
6 青山2号	大字可愛字青山	丘陵斜面畑	円形か、径2m 高1m	畑により一部破壊
7 鮎 田	大字多治比字西浦	丘陵斜面 水田	方形 2.0×1.5m	完 存
8 日南1号	大字多治比字日南	丘陵斜面 水田	方形 1.5×1.5m	畑により一部破壊
9 日南2号	大字多治比字口南	丘陵斜面 水田	円形か 2.5×1.5m	畑により一部破壊
10 日南3号	大字多治比字口南	丘陵斜面	方形 3m×3m	上に五輪塔が集められ ている

第1表 吉田町北部積石塚一覧表

次に森山についての伝承をみると、この地の民話に「森山狐」というのがある。その概要是“郡山合戦の折、古くから郡山城の難波谷に往んでいた老狐が、仲間の狐を集めて毛利方に加勢し尼子軍の眼をあざむいた。毛利家はその礼としてこの老狐に郡山城の大手口の近くにある森山という小さな山と3畝6歩の宅地を与えた。このことにより老狐は郡山の番人として後々まで御用を務めた”というもので、その影響から最近までこと山の木を切るとたたりがあるといって恐れられていた。

吉田町北部におけるこの種の積石塚には、確認されているものだけでも次の10ヶ所がある（第1表）。これらはいずれも城跡あるいは古戦場の近くにありこうしたものとの関係が考えられるが、平地に立地し水田中にあるものが多い。また、斜面にあっても周囲が開墾され人目につきやすいところに立地している。形態には方形と円形の別があるが、その区別が何によるものかは明らかではない。また規模はほとんど2~3mの小型のもので、内には大賀堀積石塚のように内部に甕が埋葬されていたものもある。さらに特徴とされることいはれども何らかの意味で大切に保存されていることで、古くから墓ないしはそれに類するものとして扱われていたものらしい。

（小 郡 隆）

2 調査の経過

森山積石塚は、吉田町市街地から比較的近くの水田中にこんもりした森をなして、森山狐の伝説やいい伝えなどもあったため、地元では古くから大切に保存されてきた。

ところが昭和40年代に入って広島県開発局はこのあたり一帯を高田地区土地造成事業用地として選び造成を計画するところとなった。昭和48年4月、たまたま現地をおとずれた県教育委員会職員は計画地内に森山積石塚が含まれていることを知り、開発局あて保存を申し入れたが、同年10月には県教委あて発掘調査の依頼がなされた。

県教委ではこれに対し再度保存を申しいれ、以後再三再四協議を行なったが、同地が計画地内のほぼ中央部にあたるため、その保存は困難であるとの結論に達った。この結果昭和49年5月には開発局より文化庁長官あて発掘届が提出され、発掘調査は5月27日から6月21日までの24日間行ない、県教委文化財保護室の小都隆、木村妙子があたった。

調査は、墳丘の構造解明に主眼をおいたが、墳丘はすでにその半分近くが道路として削平されており、立地的にもしばしば洪水に襲われた水田中にあるため変形している可能性が考えられた。

そのためまず現状の詳細な図面を作成し、図上である程度の復原をした後中心を求め、それを基準として墳丘を四分し、その中軸線にそって断面図をとりつつ掘り下げていった。墳丘は径11mのほぼ円形をなし表土以下7層に細分されたが、作業にあたってはその層位毎に平面図をとり、あわせて断面図も合成していく。

また墳丘の外周についても何らかの遺構の存在の可能性が考えられたため、中軸線にそつて幅1m、長3~5mのトレーナを入れて調査を行なった。詳しくは以下発掘調査日誌抄のとおりである。

発掘調査日誌抄

1974年（昭和49）

5月27日（月） 晴

朝広島を出発、午前中吉田町教育委員会で発掘調査のうち合せを行ない、午後1時より関係者出席のもと現地で慰靈祭を行なう。

5月28日（火） 晴

地形測量を行なう（300分の1）。

近景の写真撮影を行なった後、排土作業にとりかかる。

5月29日（水） 曇

排土作業を続ける。墳頂部分では、地表下20~30cmに河原石が散布しているのが検出される。

5月30日（木） 曇時々雨

排土作業を続ける。河原石はかなりの面積に広がっているが、その配置は不規則であり、浮いたものも多い。

5月31日（金） 曇

墳頂部分をほぼ明らかにした後、河原石の清掃、写真撮影を行なう。

6月1日（土） 晴

河原石の実測を行なった後、石をはずして排土作業を行なう。さらに20cm下にも河原石が散布しており、墳頂部では20cm大の角礫が方形に並んでいた。またこれらの石の下は土がかたく、基壇の状態を呈している。

6月3日（月） 晴~6月5日（水） 曇のち晴

基壇状の造構を検出し実測を行なった後、さらに下に掘り下げる。基壇の下から、さらに河原石の石積みが検出される。

墳丘の南北、東西断面の実測を行なう。

6月6日（木） 曇~6月7日（金） 晴

積石の清掃を続ける。

6月8日（土） 晴

積石の清掃を続ける。墳丘裾部の排土作業を行なう。

6月9日（日） 晴

積石の清掃を続ける。なお、墳丘の外周には円形に石列が検出された。

6月10日（月） 曇

積石の清掃を完了し、写真撮影を行なう。積石実測のため造り方をうつ。

6月11日（火） 小雨のち晴

積石の実測を開始する。墳丘北半の農道部分の発掘を開始する。

6月12日（水） 晴

積石の実測、農道部分の発掘を続ける。

6月13日（木） 曇のち晴

積石の実測と並行して石の除去作業を開始する。

6月14日（金） 晴

積石の実測、石の除去作業を続ける。積石の層の下は黒色土層となり、墳丘中央部においては腐蝕した人骨を多量に含んでいる。

墳丘の南北、東西両断面の清掃、写真撮影、実測を行なう。

6月15日（土） 晴

人骨の検出ならびに排土作業を行なう。

6月17日（月） 曇のち雨

周囲の水田の中に設けたトレンチの排土作業、および壁面の写真撮影、実測を行なう。

墳丘は人骨の検出と排土作業を続ける。

6月18日（火） 晴～6月19日（水） 晴

墳丘の東西にトレンチを設けて排土作業を行なう。断面の清掃、写真撮影、実測を行なう。

6月20日（木） 曇

墳丘の南北にトレンチを設け、発掘、断面の清掃、写真撮影、実測を行なう。

墳丘中央部は人骨の検出と排土作業を続けたが、人骨に密着した形で土師質土器3個体分が出土した。人骨と土師質土器の写真撮影ならびに実測を行なう。

6月21日（金） 雨

発掘現場の整理および道具の撤収を行なって、すべての作業を終了する。

(木 村 紗 子)

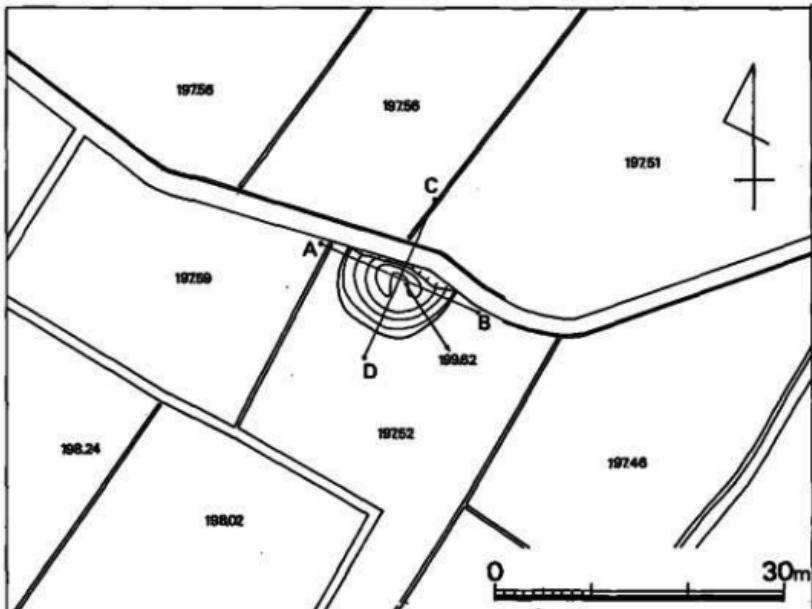
3 検出の遺構

本積石塚は、吉田町市街に近い郡山城東側の標高 200m ほどの可愛川の沖積地に位置する。現在周囲は水田として開かれているが、往時は洪水によりいく度となく水没したようである。

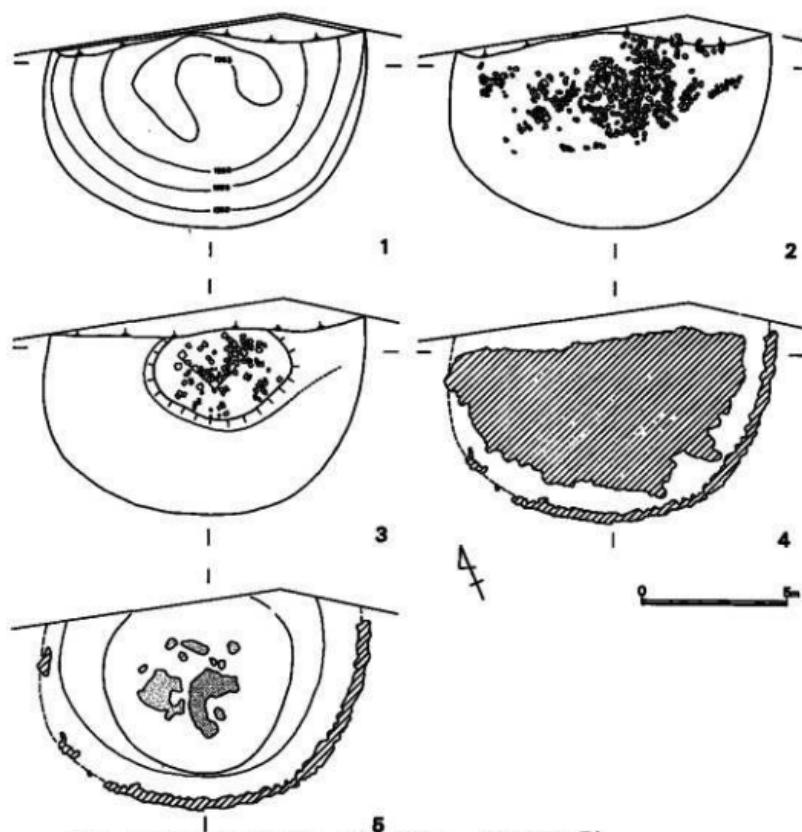
明治年間の道路取り付け、さらに昭和に入っての拡張によって遺跡の北側 3 分の 1 を道により削り取られてしまったが、地形測量の結果からすると、元来は直徑約 11m、高さ約 2m の円形プランをなしていたと思われる。

墳頂部は平坦に近く、中央部には凹みがあり盗掘の痕跡がみられたが、それほど深いものではなく表土を掘り返したのみで終わららしい(第3図1)。

地表面下約 20cm の表土中には 10cm 大の河原石の広がりがみられたが、乱雑な状態を呈し、造構として捉えうるものではなかった。これは、この地域における可愛川の堤防がいわゆる“かすみ堤”的形態をとり、大洪水の際には下流地域の氾濫を防ぐために沖積地の下流部分で自然に堤防が決壊するようになっているし、江戸時代の文獻にも洪水の記録が多くみられ、



第2図 積石塚地形図



第3図 積石塚層位別平面図 (斜線は積石 アミ目は人骨)

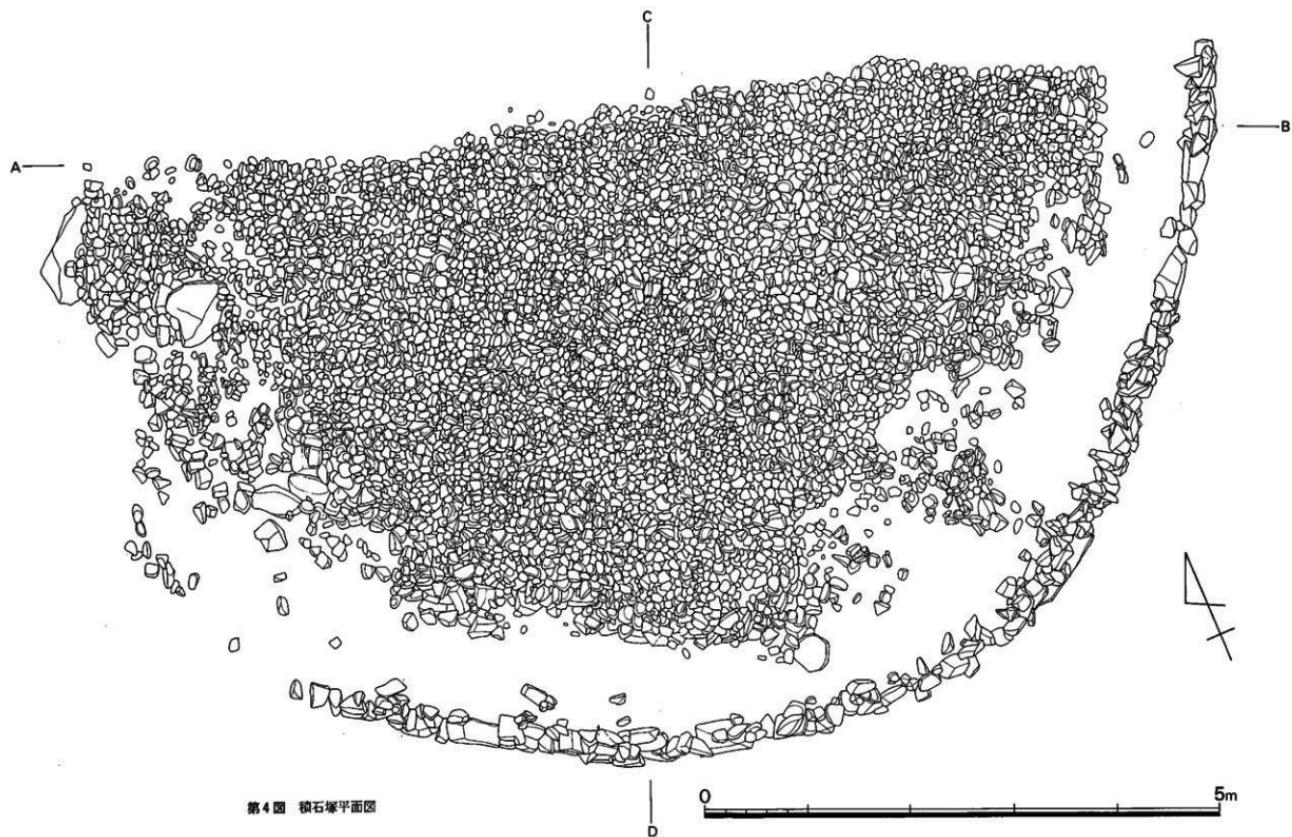
1. 調査前平面図 (第5図の1層) 2. 表土下の積石平面図 (1層)

3. 基壇平面図 (2層) 4. 本来の積石塚平面図 (4層)

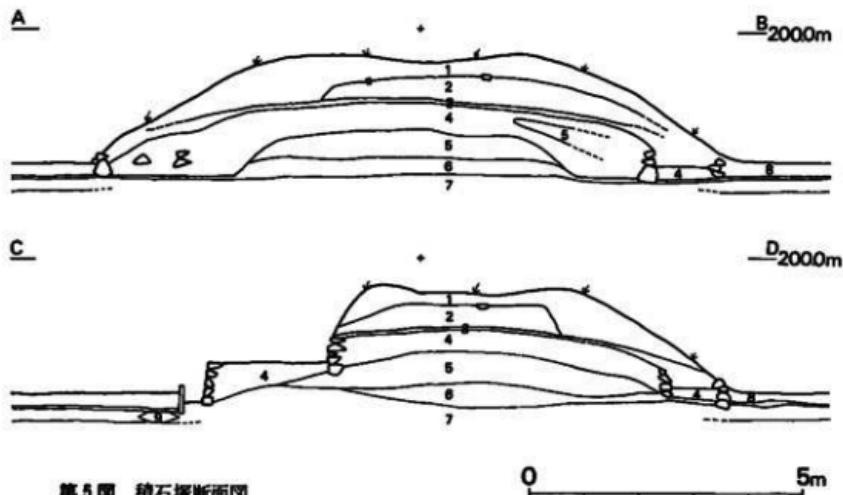
5

吉田の町並を中心とする沖積地はかなり頻繁に洪水に見舞われたらしいので、表土中にみられる河原石は、おそらく氾濫時に周辺の平地に流れ込んできたものを投げ上げたものであろう（第3図2）。表土も砂質の土であって、やはり洪水時に堆積したものと考えられる。

表土の下は、粘土を含む土が上面を平らにつき固めたような状態でみられたが、これは一辺約3.7m、高さ0.5mの方形に近い基壇状をなし、その上に10cm大の河原石が散布していた。また中央部には角礫が上面をそろえ、一辺約1.8mの方形に並べられていたが、この角礫は比較的大型の石が用いられており、建築物の土台と考えられる。これは、江戸中期に荒神社が



第4図 積石塚平面図



第5図 積石塚断面図

- 1. 表土層
- 2. 粘土混りの暗褐色土層（基壇）
- 3. 川砂層
- 4. 黒色土層
- 5. 鉄分を含む黒色土層
- 6. 川砂混りの黒色土層
- 7. 川砂層
- 8. 耕作土層（水田）
- 9. 黒色粘土層

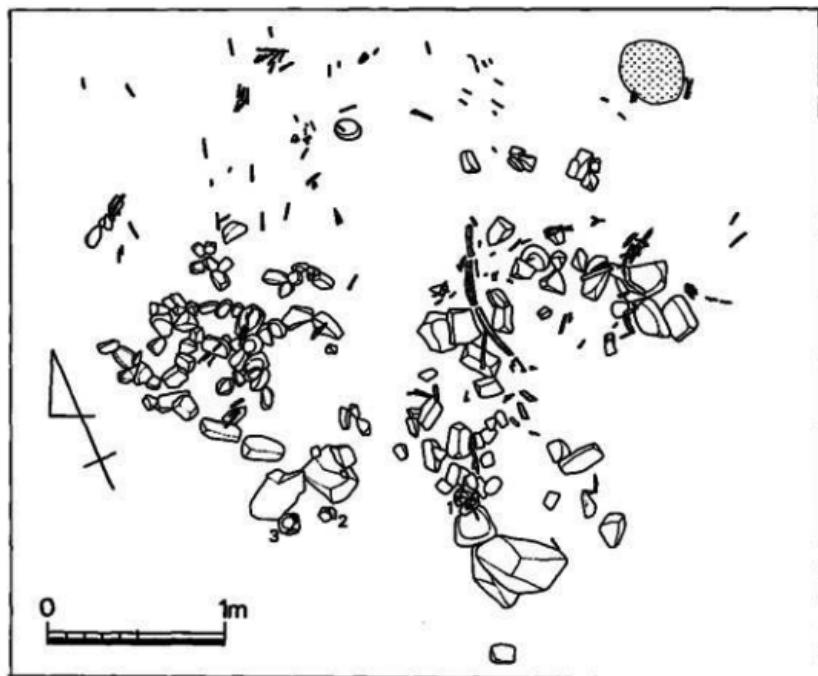
あったと考えられるので、それに伴なうものであろう（第3図3）。また、墳丘東側の斜面には傾斜に沿った形で西から東にかけて10cmの河原石と角礫の列石がみられたが、これは祠への登り道の造構とも考えられよう。

基壇の下は厚さ約10cmの川砂の層となるが、先にも述べた通りこのあたり一帯は何度も洪水に見舞われており、その時に可愛川により運ばれてきたものであろう。川砂はその下の積石の間にもかなり入りこんでいた。

積石は、5~15cm大の河原石を用いて厚さ50cmほどに積み上げており、石積みの裾の部分は20~50cm大の扁平な角礫や大きな河原石を使用し、それを3~4段の石垣状に積み上げて崩れにくくしているが、単にそのためだけではなく、構築当初何らかの意味があったものと思われる。ただ西側の裾部ではこうした石積みはみられず、また河原石の分布も粗でかなり乱れた様相を示しているが、これは洪水ないしはその他の原因により積石が崩れ落ちたものであろう。墳丘は道路により北側3分の1余りを削り取られているが、道路を掘り下げたところ、下には積石が一部残っていた。これらを総合すると、積石は元来、周囲を石垣状に積み上げ、その内側に石積みを行なった直径約9m、高さ1m程度の円形をなしていたものと考えられる。なお道路取り付けにあたっては、積石の崩落を防ぐため、道路と遺跡の境の壁面に石垣を設けていたので積石の保存は割合に良く、現存部分についてはほとんど原状通りと思われる。

また積石の裾から外側へ1mの範囲には、10~20cmの厚さで積石に用いられたと同じ河原石が散かれ、その外周には積石塚を取り囲む形で円形に石列がみられた。この石列は20~60cmの角礫を3~4段の石垣状に積み上げた強固なものであり、墓域を画するものと考えられる（第3図、第4図）。

人骨は、積石の下の黒色土層中、墳丘の中央部やや南東寄りに約3.5×3.5mの範囲にわたって検出された。中には大腿骨かと思われる部分もあったが、そのほとんどは細片であって、黒色土の中に混じった形で多量に発見され、いずれも黄褐色に腐蝕してボロボロになっており骨の部位の識別も困難であった。すべて土葬骨であり、その分布状況からして数体の埋葬と考えられるが、埋葬に関しての特別な施設の設けられた形跡はない。ただ人骨の下には一部に河原石がみられ、人骨が河原石に密着した状態で発見されたことから、遺体の下には部分的に河原石を敷き並べていたらしい。（第3図5、第6図）



第6図 人骨・副葬品出土状態実測図

（1~3 土師質土器 アミ目は炭化物の広がり）

また本積石塚の築成にあたっては旧来の地表面をそのまま利用したと考えられ、埋葬は地表面にある程度の土盛りをして土台とし、部分的に河原石を配置して、その上に数体の遺体を並べ土盛りをした程度のものであったと思われる。

なお人骨密集部分の南側、人骨の下部からは土師質土器（壺）3個体分が伏せた形でみつかったが、これは埋葬の際に副葬されたものであろう。

積石塚下の旧地表面以下は川砂を含んだ黒色土層となるが、これは確認されただけでも現地表下1m以上の厚さをもっており、その中には須恵器片が含まれていた。また、この土は墳丘外側の水田下では水田下端よりさらに下部へ厚さ20cmにわたり水田と同じ粘土質の土となっており、水田耕作のため変質したものと思われる。このことから、積石塚はこの地域が水田として開かれる以前にすでに存在していたということになる。　（木村妙子）

4 出土遺物

出土遺物には、須恵器、土師質土器、陶磁器、土製品、石製品、鉄製品、古錢、スラグ、人骨がある。

須恵器（第7図9、10） 須恵器は最下層の黒色土層と積石中にそれぞれ1片ずつ含まれていた。

9は最下層の黒色土層から出土した高台付の壇の底部で灰色をなし、焼成は良好である。外面にはろくろ痕が残り、底部は内外面ともヘラで削り取った跡がみられ、また高台は断面3角をなし貼付けた跡が残ること等から平安期を前後する時期のものと考えられる。

10は積石中に含まれていた壺の口縁部で、口縁は垂直に近くたちあがり、口唇部は玉縁となっている。内外共にみずひき調整が行なわれ、焼成は良好で暗褐色をなしている。

土師質土器（1～8） 土師質土器には積石下の埋葬人骨周辺に副葬されていたもの（1～5）と、積石中に含まれていたもの（6～8）があり、計13個体以上が確認された。

1は口径12.5cm、高さ3.2cmの壺で、底部は大きく口縁は内折している。底部内面は左まわりに指で調整し、外面には糸切り痕が残る。内外共にみずひき調整し、明るい茶褐色で焼成は良好である。2は1とほぼ同形のものでこの種のものは他に2個体ある。

3は口径12.8cm、高さ3.3cmの壺で、口径に比して底部は小さく、口縁は直に外反している。内外ともにみずひき調整し底部は糸切底をなす。4、5も3と同様のものと思われる。

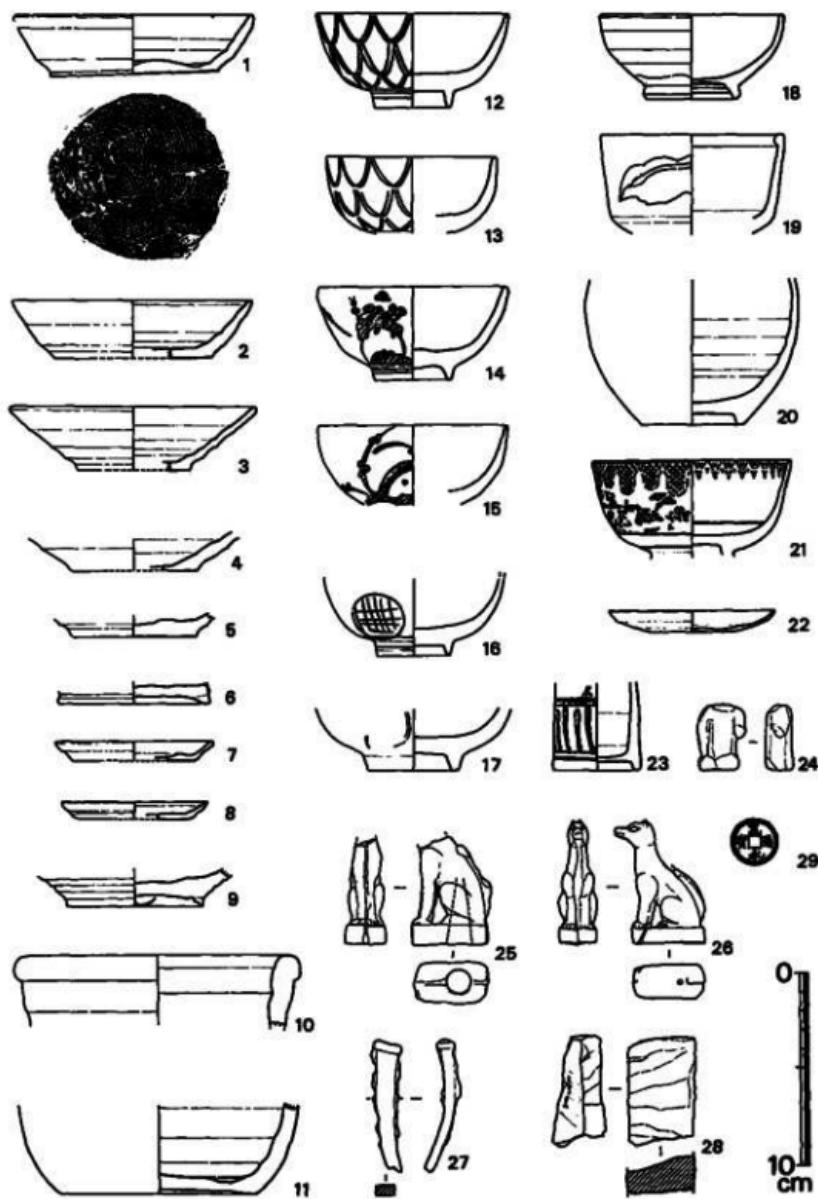
6は高台のついた壺の底部で、底径が7.8cmある。糸切り痕が顯著で、高台は底部にはりつけている。内外共にみずひき調整した灰褐色の土器である。7は口径8.2cm、高さ1.0cmの小皿で、内外共にみずひき調整し糸切りの痕跡がみられる。褐色で焼成はよくない。この種のものは他に2個体ある。

これらのうち1～5は戦国期に比定されている山田積石塚や福礼中世墳墓出土のものに類似した点が多いことから、これに近い時期のものと考えられる。

陶磁器（11～23） 陶磁器は11が積石下にあった他すべて積石直上および墳丘端から出土したもので約150片がある。

11は底径9.9cmの壺または甕の底部で、凹底からまるみをもっていちあがっている。内面にはろくろ痕がみられるほか、外面はヘラで、底部は指で調整している。胎土は褐色で内外面とも暗褐色をなし織物焼と思われる。

12～16は伊万里焼の湯呑で、いずれも白地に藍の染付けがほどかれている。12、13は胴下半



第7図 出土遺物実測図

をふくらませた器体全面に網目を描いたもので、12は口径10cm、高さ4.9cmを計り、13はそれよりやや小さい。

14、15は12と同じ大きさであるが、胴部の張りは小さく、外面には花を表現したと思われる文様が描かれている。14は地肌も染付けも他とはやや異なり多少年代が上の可能性がある。

16は胴下間に2つが対になった円文を6つ描いている。

17はやや大きめの湯呑で、全面に淡緑色の厚い釉がかかっており、唐津木原窯のものと思われる。

18は口径9.6cm、高さ4.5cmの小型の碗で、高台のついた角ばったものである。内外ともに暗緑色の釉が薄くかかり、胎土は灰褐色でち密なものが用いられている。器形は、色調とともに特異なもので国外で作られた可能性がある。

19は口径9.6cmの直口口縁の碗で、口唇部内面を内側に肥厚させている。黒地に白で木ノ葉状の文様を描いており、胎土は茶褐色をなす。

20は底径5.4cmの徳利状のもので灰白色の釉がかけられている。

21は口径10.3cmの湯呑で、内外面とも藍で印判による複雑な文様を施している。これは明治年間県内で多量に生産された小谷焼の典型をなすものである。

22は口径8.7cm、高さ8.7cmの小皿で、全面に暗褐色の釉がかかっている。これは燈明皿として明治年間まで使用されていたものである。

23は底径4.5cmの円筒形に近いもので、白地に藍で区面線や縱線の文様を描いている。

このように陶磁器は量的に多かったが、その70%以上は伊万里焼であり、しかも時期的には新しいものを中心としていた。またその他には唐津木原窯、小谷焼等がみられたが、これも時期的には新しく、江戸後期半から明治にかけてのものが大半であった。

土製品（24～26） 土製品はいずれも墳丘端から発見されたが福荷人形2と人形1の計3点がある。

24は頭部を欠損した人型または仏像で現在高3.5cmを計る。25.26は福荷人形で、土台にコマ犬風の狛座像がのこっている。外形は型にはめて作ったもので接合部は必ずしも合致しておらずズレがみられる。いずれも胎土はキメの細かい粘土を使用し、焼成は比較的良好である。なお底部に25には径1.3cm、深3.5cmの、26には径0.3cmの小孔がそれぞれ穿たれており、作成時のものと思われる。26は縦6.4cm、横3.8cm、幅2.0cmを計り、25はそれよりやや大きい。

鉄製品（27） 鉄製品は基壇上から出土したもので、断面方形で頭の小さい鉄釘がある。

石製品（28） 石製品は積石中に含まれていたもので砾石の破片がある。石質は明らかでないが仕上砥用のきめの細かい石が用いられており、厚さ3.5cmを計る。

古鏡（29） 古鏡は積石上に4枚みられた。いずれも寛永通宝で後世鋤入したものと思われる。

スラグ　スラグは積石中および人骨周辺で3～15cm大のものが計8点出土した。

人骨　人骨は積石下の黒色土層上に河原石と共に径2.5cm、厚さ0.5cmの範囲に散乱した状態で発見された。腐蝕がはげしく明らかではないが焼かれた痕跡はなく、四肢もバラバラで頭骨と思われるものは全くみられなかった。その広がりと堆積からみるとかなりの人数が埋葬されていたものと思われる。

以上のように出土遺物には多種多様なものがあるが、これを層位別にみると、最下層の黒色土層では平安期と考えられる須恵器、積石下の人骨が埋葬されていた土層では戦国期と思われる土師質土器焼とスラグ、備前焼、石積中および直上では江戸後半期の陶磁器、古銭、基壇上や墳丘端ではさらに新しい時期のものを含んだ陶磁器、土製品、石製品、鉄製品といふうに比較的明瞭に差があることがわかる。

(小 部 隆)

5 ま と め

森山積石塚は吉田町市街地のやや北寄り、郡山城の南東約300mの水田中に位置した徑11m、高さ2mの積石塚で、構造的には積石塚そのものと後世の追構とに分けることができる。すなわち本来の積石塚とは、旧地表面にわずかに土盛りを行なって死体をならべ、一担土砂の被覆を行なったのち徑10~20cm大の河原石でおおつたもので、この外周には幅1mにわたって石敷を行ない周囲と区画をしている。また、後世の追構とは、積石塚が洪水等により砂をかぶり单なる小丘となった時点においてその上に基壇を築き1辺約1.8mの建物が建てられていたものである。

これらは、それらに含まれていた遺物との比較により、それぞれ戦国期、江戸期に比定されるが、これを文献と比較してみると、積石塚については、当時この近くで永正年間（1500~1510年代）と天文9年（1540）にそれぞれ戦乱があったことから、そのいずれかの戦死者を葬ったものと考えることができる。また江戸時代の建物については、宝曆9年（1759）にはこの地に稲荒神があったとされ、文政2年（1819）にはすでに廃祠となっていることから宝曆年間を中心とした時期に荒神社が建っていたものと思われる。文政以後については明らかではないが、元治元年（1864）の地圖によると、この地は樹木の茂った小山となっていることから、文政以後は構築物はなかったと考えてよかろう。ただ墳丘端表土からは稻荷の人が出土しており、森山狐の伝承をもあわせ考へると、一時的には稻荷をまつた小祠があつたことが想像される。

郡山城を中心とした吉田町北部一帯には積石塚が比較的多くみられるが、それらはいずれも規模が小さい。また森山積石塚の西約700mにある大賀屋積石塚では造成の際、積石中より斐が出土しているし、山一つへだてた甲田町山田積石塚でも骨壺が発見されていることなど、内部主体の明らかなものの例は少ないが、小規模なものでは骨壺を使用している可能性が強い。従って假りにそれらと時期的にあまり差がないとするなら、森山積石塚のように死体をそのまま埋めるという方法は特異なものといえるであろう。このことからみて、この積石塚を戦死者のものとするならば、吉田町内においても首塚とか手塚とかの名が残るよう、郡山合戦の戦死者を集めて埋めたという記録もあることから、小型で骨壺を内部主体とするものが個人を対象とし、それも上級武士たちのものとするなら、こうしたものは下級武士を対象としたものとすることができるのであるまい。

ともかく県内にはこの種の積石塚が比較的多いのに対し、調査された例は非常に少ない。同じ宝町～戦国期に比定されているものでも山田積石塚のように火葬骨を骨壺にいれて埋葬する例、西坊墳墓群（双三郡吉舎町）、王子原積石塚（賀茂郡大和町）のように火葬骨をそのまま埋葬する例はみられたが、森山積石塚のように死体をそのまま埋葬する例はいまだなく、この種の研究に新例を加えたといえよう。

（小都 隆）



a. 積石塙遠景（西より）



b. 積石塙近景（北より）



a. 表土層の状態



b. 積石塚全景 (東より)



a. 積石塚全景（南より）



b. 積石塚断面（南より）



a. 積石塙外周断面（南側）



b. 人骨出土状態



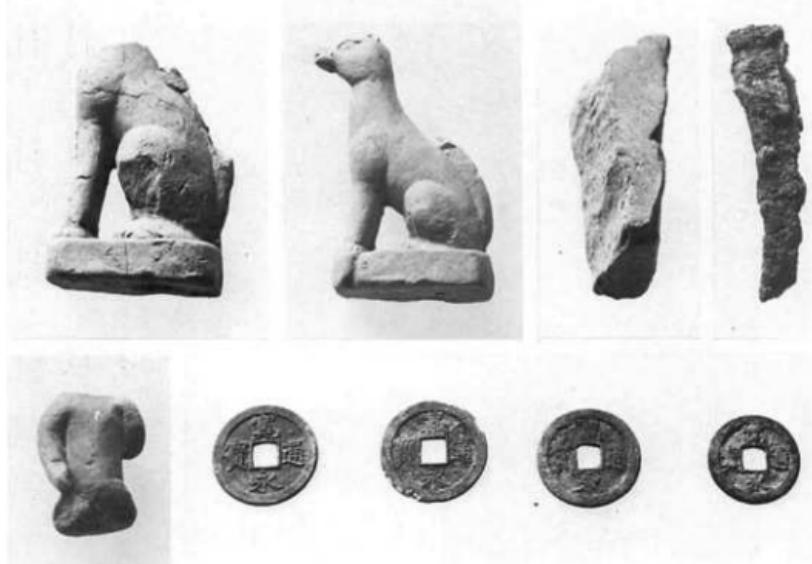
a. 人骨：副葬品出土状態



b. 土師質土器出土状態



a. 土師質土器・須恵器・陶磁器



b. 土製品・石製品・鐵製品・古錢

あとがき

本概報は、昭和49年に広島県開発局の委託を受けて広島県教育委員会が実施した高田地区
土地造成事業地内に含まれる森山積石塚の発掘調査概報である。本概報の作成および執筆は
広島県教育委員会文化財保護室職員の小部隆、木村妙子があたり、編集は小部隆が行なった。
なお発掘調査にあたっては吉田町教育委員会、吉田町文化財保護委員会、吉田町立吉田郷
土資料館、株式会社 砂原組吉田作業所、ならびに杉谷卯一、藤井正怒、小林徳久氏ら地元の
方々の多大な協力を得た。記して謝意を表したい。

1975年（昭和50）3月

広島県高田郡吉田町

森山積石塚発掘調査概報

編集・発行 広島県教育委員会

印 刷 文化印刷株式会社